

薬の伝言板～帯状疱疹～



No. 230 2017年1月

丸子中央病院 薬局

帯状疱疹とは、体の片側に起きる、強い痛みと、痛みがある部分にできる帯状の赤み、ブツブツ、水ぶくれが特徴の病気です。最も多くみられる年代は50～70歳代ですが、ストレスや疲れが溜まっていると若い人でも発症することがあります。

○原因

帯状疱疹はウイルスによる感染症で、その原因となるのは水ぼうそうを起こすウイルスです。このウイルスに初めて感染すると水ぼうそうとして発症します。ウイルスは水ぼうそうが治っても体内の「神経節」と呼ばれる、背骨の近くにある神経細胞の集まっているところに隠れています。加齢、ストレス、疲労などにより体の免疫が弱くなると、隠れていたウイルスが活発になり、神経節の神経に沿って皮膚や神経を攻撃しながら増え始めます。これが帯状疱疹です。



○症状

皮膚の症状の出る数日～1週間前から、ピリピリ、チクチクとした痛みが起こります。

その後、強い痛みを伴い、身体の片側の神経に沿って帯状にやや盛り上がった赤い斑点があらわれます。

続いて赤い斑点上に水ぶくれがあらわれます。水ぶくれは破れてただれた状態となり、かさぶたへと変わります。

○発症部位

胸や背中などの胴体部分に特に多くみられ、ひたいなどの顔面にもよくできます。その他、腕や足にできる場合もあり、全身のどこでもできる可能性があります。

多くの場合、体の左側か右側のどちらか片方にあらわれます。

※頭部や顔面にできた場合は注意が必要です。目に症状が出て視力障害を起こしたり、耳の帯状疱疹で顔面神経の麻痺を起こしたりすることがあります。

带状疱疹後に残る痛みについて



带状疱疹の皮膚の症状が消えた後も、痛みだけが長期間（3か月以上）にわたり残ることがあります。これを**带状疱疹後神経痛（PHN）**といいます。これは、増えすぎたウイルスが長期間にわたり神経を攻撃し、神経に傷が残るために起こると考えられています。

带状疱疹後神経痛は、皮膚の表面の痛みと奥のほうの痛み、持続的な痛みと一定の時間をおいて出たり消えたりする痛みが混じったものです。ピリピリ、チカチカ、ズキズキ、焼けるような、針で刺されるような、鋭い、電気が走ったような、など、さまざまに表現されます。

高齢者や、皮膚症状が強い場合、眠れない程の痛みが出たりする場合は、特に PHN が残る可能性が高いため、注意が必要となります。

○治療

带状疱疹の治療の基本は、抗ヘルペス薬の内服です。重症になると点滴で治療する場合もあります。

抗ヘルペス薬：ウイルスが増えるのを抑えます

内服薬：バルトレックス、ゾビラックス など

外用薬：アラセナ-A など

注射薬：アシクロビン など



痛みや炎症のひどい場合には、抗ヘルペスウイルス薬に加えて、消炎鎮痛薬やステロイドの内服を使用することがあります。痛みが特に激しい場合は、神経のまわりに直接、局所麻酔を注射する、「神経ブロック」を行うこともあります。

鎮痛薬 … リリカ・ノイロトロピン など

带状疱疹は早く治療を始めれば、皮膚の炎症や痛みが重症化するのを防ぎ、PHNが残ることを抑えることもできます。带状疱疹かなと思ったら、痛みを我慢せず、すぐに受診するようにしましょう。

また、带状疱疹になったら、まだ水ぼうそうにかかっていない小さなお子さんや妊婦さんなどには、水ぼうそうとしてうつる可能性がありますので、なるべく接触は控えましょう。

